

随想



あこがれ

山田 啓代 みちよ

合評会のために、「詩と真実」の仲間が柳川に遊んだのは、高郡逸枝女史の夫君橋本憲三氏が亡くなられた一週間後であった。

橋本氏の最期を見とられた主治医の佐藤千里さんや、研究資料の保存のことで奔走された詩人の緒方惇さんがたと同室

であったため、深夜までいろいろ話が尽きなかった。

元来私には、自己の能力の乏しさを他への憧れで補おうとするさがある。常に憧れっぱなしで、その裏返しにこのは常に劣等感ということになる。この何十年間、そうした思いに耐えてきたのだから意志だけは強いかもしれない。十年前、「火の国の女の日記」を手にしてその生き方に呼吸困難になるくらいの衝撃を受け、真剣に、私も生き方を変えようと意図した。橋本氏逝去の報にふれて当時を思い出し、そしてまた現在を思い、あくまでも「意図」しただけに終わっている不甲斐なさをしたかに思い知らされている。

かつて、日本新おんな系図を書いた大宅壯一氏は、筆頭にわが憧れ「熊本」の「熊本」をあげた。竹崎順子、矢島輝子、嘉悦孝子、久布白落実、河口愛子、そして高群逸枝といった女性たちである。「意志が強く、どんな難境にもへこたれず、またどんな年をとってからも新しい人生にむかって再出発することができる」「まず自らを教育し、子供の教育にうちこむばかりでなく、ときには夫をも教育し、さいごに社会を教育しようとする」と氏が嘆じた熊本女性の伝統は、果してどのように現代にひきつがれつつあるのだろうか。

最近、二冊の書物を通して三人の女性に出会う機会を得た。シルクロードへの

策もなく、ぼつぼつ放任園やら抜根という手合いも始めていたりするし、そんなわけだいつの日にかは適当なところに取りまるといふものであろう。

しかしそんなことは無関係に、季節が変るごとに温州・八朔、甘夏といっせいに咲いては、昏れ残るその白さと共に、春の宵、付近一帯を甘い香りで満たすのである。私の園の麓にある団地の人に会うと、「花が終わればさびしく、熟れたミカンが収穫されるとまたさびしくなる」と語りかけられるのであるが、それほどまでに視覚・嗅覚に親しまれ、なじまれてしまっているのだから。

その私の園は、地理的にわりと恵まれているせいか、年間を通して適当な来園者がある。たまにはめずらしい人であったりする場合もあるが、主に月例会をするグループの仲間や友人たちである。

ときには作業中に、近所のNさんやNさんからおいしいお茶やジュースの差し入れがあったりもする。MやYなど、山荘近くまで来て大声で呼んでおいてから、しばらくしておもむろにやってくる。そして「なんだ、ひとりだったのか」などとひやかすのである。自転車にも乗らず、いつも町の中から歩いて来られるT・Nさんは園道で立ち止り立ち止りしては「いつ来ても、いいですわねえ」と連発される。緑、風、眺望などの四季の変化、そしてそれらを受取る人たちによる会合のうちとけた語りいとふれ合い、

旅を記した水野破魔子、河上洋子両氏と、「小さな庭の中で」の宮川久子氏である。猛婦とまたちがった「雅びの世代」とでもいった憧れを抱かせる。社会的な視野は勿論であるが、それに加えて、大正のロマンとでもいった豊潤なものが文章のはしほしに息吹いている。

時代はほんのちよつとさがっただけではあるけれども、疎開時代、あるいはヤミ市派と言われる私たちが、たとえどんなに努力したとしてもおそろく手に入れないことのないそれは「何か」である。歌仙を巻くといった雅びがすんなりと身につけているのも、おそらく女史たちの世代まで、という気がする。次の世代に憧れを抱かせる何のちあわせもないさびしさをかみしめながら、そう思う。

ともあれ、明治以後婦人の地位向上につくした逸材を数多く生みながら、あるいは女性に限らず傑出した人物を出しながら、一部の研究者にしか知られない熊本の現実、北原白秋がひとり支えているかみえる柳川の風土と極めて対象的である。柳川の店を歩くと口々に、白秋先生のおかげです。といった声が聞かれる。それが白秋の本意ではないにしても、唯我独尊的で排他性が強いと、大宅氏が一方で指摘した熊本のお国柄というものを、このたび柳川に遊び考えさせられた。

(婦人警察員・詩と真実同人)

ない難しい質問で、ギクリとさせられない。

年だけは人なみにとったが、堂々と答えられるようなものを持たないからである。

人間と生れたからには、何か世のため、人のためになるようなライフワークがなければならぬと思うし、それかといって、特別な才能も知識もない自分に、一体何ができるだろうかという、疑問とも自嘲ともつかない考えが先にたっしてしまう。

自分の力の範囲内でできること、楽しくできること、他人がやろうとしないこと、そして、それが自分の骨を埋める故郷に関するものが、何か一つぐらいありそうなものだと考えはじめた。ところが、或る日突然それは決まった。

梅雨明けの明るい草丘の麓に咲いている一本のハナシノブをやっと探しあて、これにカメラを向けている時だった。「そうだ!!この野の花たちを、絶やさないことだ」と。

私の住んでいる高森町は、美しい自然が失われ、破壊されつつある日本列島の中で、稀にみる動・植物の宝庫として、専門の学者間ばかりでなく、各界で高く評価されてきた。特に植物では、日本中何処を探しても見当たらない独特の珍しいものが幾つかある。しかもこれらの花は、その貴重さにおいても、又美しさに

ミカンの花

末松 正身

ミカンの花が咲いた。この花の季節は、私がミカンづくりをしていてひとしお深い喜びを感じる時期でもある。それは、ミカン園経営という感覚を越えた楽しさというか、色づいた果実を収穫する事とはまた一種違った、心の底にゆとりを残しているようなたぐいのものなのである。

ミカンの花は、だいたい樹が健全なものの花弁も厚く、眩しいばかりの白さを放っている。觀賞用のいろんな花と比較するとそれは、色彩も単純できわ立つようなざらびやかさはないかも知れないが、しかし五月の太陽を眺め返すような充実した生命力をも感じさせ、とうとうと実に美しい。

昔はふつう、病人ぐらいしか食べることができなかったというミカンの実そのものの方は、ひところの増殖ブームで、今は反対に余り過ぎて困るという事態と悩みをかかえている。そして決定的な対

おいても、他にその比をみない「幻の花」と言われているものばかりである。先に述べたハナシノブの外に、ツクシマツモトやヤツシロソウ、ヒメユリなど、決してその数は少なくない。

しかし、生産性を上げること、利潤を追求する社会的要求や、人間の欲望が、何時までも阿蘇を今のままでそっとしておくなどということはあり得ないし、現に阿蘇を畜産の一大基地化する構想や、大企業によるレジヤランドの進出、大型道路の建設、採石場問題などの外、私有地の草地改良や植林化など、阿蘇本来の植物の前途は余断を許さない状況である。特に、生育地が限定され、その数も僅少な前記の植物は誇張でなく絶滅寸前にさらされているといっても過言ではない。

或る人は、珍しいとか、貴重だとは言っても、たかが一本の草ではないかというかもしれない。しかし一度消えたものは、もう二度と帰ってこないことも事実である。

そして、それを絶やさないことこそ、遠い祖先の代から共に阿蘇で生きつづけてきた者の責任ではないだろうか。

ちっぽけな、ささやかな願いではあるが、自分自身で満足できる生涯の仕事をやっと見出した喜びにひたりつつ、目下試験園などを整備しつつ、楽しく将来の夢をふくらませている。

(阿蘇と自然を守る会員)

野の花と生きる

(農業・耕士の会々員)

それはたしかに魅力のあることであり、すばらしいことにちがいない。それらをかもすがごとく、ミカンの花は清楚である。そのミカンの花にしみてみれば、年ごとにへたな主の技術で手を加えられただ咲くよりは、求める人々の訪問を受けてこそ、よけいに咲きがいがあるというものだろう。

新緑に囲まれた山荘「雉鳩庵」の、開け放った窓からは、微風に乘ってそれら花々が甘くにおよそ近くである。

還暦を迎えたせい、急に老人扱いはれるようになり、「これからは、何を楽しみに、どうして暮してゆくのか」といった種類の質問を度々受けるようになった。

佐藤 武之

問われてみれば、その答えはやさしいようだが、仲々おいそれとは返事のでき